

させ、コーピングメカニズムを活用することでバランス保持要因を補充し、系統的な問題解決を図ったことでA氏は元々の前向きな姿勢を取り戻せたと考えられる。

### 3. スピリチュアルペインを抱える終末期乳がん患者への看護支援 一村田理論を用いたアプローチ

加藤 咲子, 瀬山 留加, 神田 清子

(群馬大医・保・看護学)

清水 裕子

(公立富岡総合病院)

【はじめに】 事例紹介: A氏, 60歳代女性, 乳がん術後再発, 多発性脊椎転移。乳がん術後再発に対して放射線療法を施行後, 在宅療養をしていたが胸膜播種に伴う胸水貯留による呼吸困難, 脊椎転移によるがん性疼痛の増強により緩和ケア病棟へ入院。入院後, 身体的な症状緩和は図られたが, 強い孤独感やADLの低下等によりスピリチュアルペインを抱えている状態であった。そこで, 村田理論を用いて看護介入を行った結果, 家族の関係性への認識に変化が認められたので, ここに報告する。

【方法】 村田理論(人間存在を時間性, 関係性, 自律性で捉え, これらの評価を元にスピリチュアルケアの指針を立てる理論)を用いた介入事例検討。【結果】 A氏は家族関係を希薄に感じ, 孤独感や不安感を強く抱いており, 関係性が揺らいでいた。さらに, 病状の進行に伴うセルフケア能力の低下に対して苦痛を感じており, 自律性も揺らいでいる状態であった。関係性に関しては, 家族関係の支持や, 傾聴やマッサージ等の看護ケアを行った。また自律性に関しては現在行えていることを肯定的に評価し, 日常生活の具体的な支援方法をA氏自身に決定してもらった。介入の結果, A氏より「家族が今の自分にはかけがえのないもの」といった言葉や, 看護ケアに対して「触れられているだけで安心する」といった言葉が聞かれ穏やかな思いを表現されていた。一方で「自分では何もできない」との言葉が繰り返され自律性の喪失は強いままであった。【考察】 村田理論を用いて分析することにより, 人間存在の揺らぎがあることが示され, 介入を行うことで, スピリチュアルペインの軽減につながる事が明らかとなった。

### 4. スピリチュアルペインを強く訴えたがん患者への看護援助 一村田理論を用いて

京田亜由美, 瀬山 留加, 神田 清子

二渡 玉江 (群馬大医・保・看護学)

須永知香子, 深澤いく子, 坂田みゆき

(伊勢崎市民病院)

【はじめに】 事例紹介: A氏, 50歳代男性, 胃がん, 多発骨転移IV期。A氏は, 骨折の危険性が高く, ベッド上での生活であり, 積極的な治療を行えない現状から, 「こんな

自分じゃ何もできない。やりたいことが何もない。」と自己存在に関わるスピリチュアルペインを強く訴えていた。そこで, 村田理論を用いてアセスメントし, 看護援助を行った結果, 「最後に他者の役に立てれば」と変化を示したのでここに報告する。【方法】 村田理論を用いた介入事例検討。【結果】 A氏は, 生の限界を強く意識し, 治療を諦めきれずに絶える思いから, 時間性が大きく脅かされていた。また, 父親としての役割喪失やキーパーソンの不在により, 関係性が脆弱となり, 日常生活を他者に依存せざるを得ない状況から自律性も脅かされていた。そのため, 看護師との関係性の強化を目的に, ライフレビューや傾聴を行い, 自律性の強化を目的に, A氏が希望する排泄セルフケア向上のための看護援助を行った。その結果, 「やっぱり管(尿道留置カテーテル)がないと動きやすいよね。」「臓器移植とかはがん患者だとしてできないのかな?最後に役立てればと思って。」という, A氏の関係性, 自律性の強化に繋がる言葉が聴かれた。【考察】 村田理論を用いて介入を行うことで, 臨床における困難な事例であるスピリチュアルペインを強く訴える患者に対しても, 看護援助の目的, 方法を, 理論的根拠をもって導き出すことができ, 明文化が可能であることが明らかとなった。

### 5. 化学療法に伴う悪心・嘔吐により苦痛を感じている患者への看護支援 ~IASMの理論を用いた悪心・嘔吐に対する症状マネジメント~

中澤 健二, 瀬山 留加, 神田 清子

二渡 玉江 (群馬大医・保・看護学)

堀越真奈美 (群馬県立がんセンター)

【はじめに】 事例紹介: A氏, 20歳代女性, 悪性リンパ腫(ステージIV), ホジキンリンパ腫・再発。ICE療法(イホスファミド, カルボプラチン, エトポシド)を6コース行い, 末梢血幹細胞採取目的にて入院。悪心・嘔吐症状に対し, 苦痛を感じながらも症状安静にて過ごすだけであった。そこで患者主体の症状マネジメントを促すためIASM(The Integrated Approach to Symptom Management)の理論を用いて看護介入を行った結果, 患者は症状に対し, 積極的にセルフケアを行うようになったのでここに報告する。【方法】 IASM(Larson P.が開発した患者主体の統合的症狀マネジメントアプローチ)を用いた介入事例検討。【結果】 A氏の語りから, 症状に対する表現力や理解力は豊富でセルフケア能力が高いと判断した。悪心・嘔吐は, 不安な思いなどの心理的影響が強く関連していた。そこで, 症状に対し自分で対処できるという自信や自己効力感を高めることを目的とし, A氏と共に方略を考え, 非薬物療法を主体としたA氏の希望する方法を取り入れたケアプランを立案した。A氏